ISSN 2187-7343

跡見学園女子大学文学部
臨床心理学科紀要

第3号

平成27年3月

ATOMI
UNIVERSITY

グループをめぐる対話

野島　一彦
跡見学園女子大学

下田　節夫
神奈川大学

高良　　聖
明治大学

髙橋　紀子
福島県立医科大学

要　約

本稿は，2013年７月14日に跡見学園女子大学文京キャンパスで開催された＜グループ研究会＞主催の「グループの『構成』とその『構造』について考え・語り合う会」の記録の一部をまとめたものである。

この会は三部構成で行われた。第一部では，野島と下田がそれぞれのグループ構成論(野島，1982)，グループ構造論(下田，1988)について論じた。続く第二部ではそれを受けて，高良がサイコドラマの立場からコメントをし，野島，下田，高良の３人で対話を行った(野島ら，2014)。最後の第三部では，参加者全員でそれぞれ思ったことを語り合った。本稿では，その第三部を紹介することとする。

１．グループにおける「自由」について

○参加者　昔は，「何々すべき」と言う人が非常に多かったので，「ご自由に」という薬が役に立ったんですけど，今は逆に，「ご自由に」というふうなのが一番いい人と，「共感を持ちなさい」とか「純粋さを保ちなさい」とか，「保つべきだ」と言ったほうが楽になる人が増えてきてるんじゃないかと思うことがあります。

○野島　そうですね。僕は，グループでは「ご自由に」と言わず，大体「今，ここで話したいこと，話せることをお互いに話していきましょう」といいます。「ご自由に」というのは一時流行った言葉ではあるんですけど，あまり僕は使わなくて。

ファシリテーターが，「皆さんご自由に」と言ったときに，ファシリテーターみずからも自由でいるという感覚が持ててるかどうかが大事です。「皆さんご自由に」と言う時の「皆さん」の中には自分も含めなきゃならないと思うんですよね。

ファシリテーターの中には，「みんなの自発性を尊重して，私はじっと待ってます」と言う人もいます。あなたの自発性は本当に待つということが自発性なのか，それとも役割としてファシリテーターは，みんなの発言を待たねばならないということなのかということで。

僕は，役割というよりは，その人の自発性が自由にしてほしいという自発的な気持ちがあればOKだし，それから発言するもしないも，その方が自発的にということであればOKだしと思うのです。ですから，形だけ何か「自由に」とか言って，そして，何となく観察者的に見てるという感じのファシリテーションは，僕は余り自由な

ことではないのではないかと思います。

○高良　例えば絵画療法でも，「自由に絵を描いてください」というのが向く人と，「目の前にリンゴを置いて，このリンゴを写してください」というのが向く人と，「家と木と人を描いてください」というのが向く人がいます。それはどっちがいいとか悪いではなくて，その都度，使い分けるということです。相手が不自由になろうと，あるいは自由になろうとも，ある意味ですべて方法論です。より投影的か，より構造的かという，その使い方だと思います。「自由に描いてください」という方がしんどい人にとっては，「リンゴを描いてくれ」という明確な課題を与えることがある。段階的に後半になる程自由にするのでもいい。最初は制限しておいて，徐々に緩めていって自由にするということです，リーダーとして。

2．沈黙の質

○参加者　沈黙のことに関してですけれども，私もすごい長い沈黙を何回もグループで体験して，沈黙というのは，扱い方によってはすごくいい効果もあるけれども，いろいろな感情がわいてくるものだなと感じています。沈黙によって介入の仕方が変わると思うのですが，グループの中のどういうところで，そういうふうに判断されているのでしょうか。

○高良　それは私の中ではグループ初期，中期，後期というのがあって，最初集まってから，7，8回くらいまでの沈黙は基本的に「退却」だろうとみなします。もちろん，すぐにしゃべる人はいますが，しゃべったらしゃべったで，「躁的防衛」といういやらしい解釈をするんですね(笑)。黙れば「退却」，多弁は「防衛」となります。つまり，初期不安をそうやって解消していると見立てるわけです。また，グループ後期で生じる沈黙は，むしろ大切で，自分を振り返っている沈黙としてとらえます。そのときには「今，この沈黙で，皆さんの中に何を感じていますか？」とか，「何に気づきましたか？」というようなことばを，場を察知し観察したうえで言います。

一方で，このまま沈黙が続いたら，グループが破壊されてしまうとか，本当に何か，みんながいたたまれなくなってしまったとリーダーが判断したとき，私たちはファシリテーターという立場ではないので，グループに任せきりにはしません。「この沈黙って何が起こってるんだろう？」とか，あるいは「沈黙合戦入っちゃいましたか？」とか，セラピストとしての言語的介入をします。

○野島　僕が一番長い沈黙を体験したのは，看護学生のグループで，1時間半のセッションで，3セッション沈黙が続いたことがありました。しかし，3セッションも沈黙が続くと，大体もう何も生まれないという感じです。僕の中での1つの目安は，これは経験則で20分。20分を超えて沈黙が続くと，大体生まれない感じがする，グループが死んでいく感じ。

○高良　先生，それ意外です。先生だったら，100分ぐらい大丈夫そう(笑)。

○野島　いやいや。

○高良　意外と短気なんですか。

○野島　いやいや。

○高良　20分だと，すぐ経つてしまうのでは？

○野島　看護学生だから，1時間半を3セッション耐える，そのトレランスはあるんよ。トレランスはあるんだけど，ただ，経験則で，いろいろ経験してくる中で，やっぱり1つの目安として，20分を超えて沈黙を続けると，大体もう死んでいくという感じです。だから，僕は時々，沈黙に入ると時計見てて，20分たったら，大体口を挟むことをしていますね。

挟み方は，高良先生と正反対なんだけど，高良先生は，グループ，あなたたちは何をしてるのか，この沈黙は何かと問いかけるという「YOU-centered」なんですけど，僕は「I-centered」で，「僕はこの沈黙は居心地が悪い」とか，「僕は何か窮屈な感じがしちゃったけど」という形で語ります。これはテクニックと言えば，テクニックかもしれないけど。

3．グループの途中で去るメンバー

○参加者　話は変わりますが，これまで参加したエンカウンター・グループで何回か，メンバーが途中で帰っちゃったことがあったんです。そういう経験をして，ファシリテーターの方のやり方って，すごく違うんだなというか，そういうやり方をするんだと思って。

○野島　そうですね，僕も何回かそういう体験がありますけど，いろんな成り行きで。あるグループでは，もうメンバーが「ちょっとこれ以上は自分はきついので，このグループを出たい」というぐあいにファシリテーターに申し出て，そして，申し出た時には，「じゃあ，そのことを，グループのなかで，グループのみんなに話してください」と言って。そこで話して，そして，その結果，やっぱり「ここで帰りたい」と，メンバーもしようがないだろうという形でドロップアウトしていったということもありますね。ドロップアウトというか，そうやって去っていった。ドロップアウトって言うと，ちょっと価値が入ってしまいますね。そういう形でグループから去っていったことがあります。

それから，あるグループでは，これは40数年もグループをやっていると，時々はグループの中で非常にクライシスが起こることがあるんですね。あるメンバーが，精神病的な状態が明らかに起こるということがあって，そのときは，僕はファシリテーターでしたが，僕は，その人を僕の車に乗せて自宅まで送り届けました。そして，もう1人のファシリテーターが，そのグループを続けました。

あと，あるグループでは，最後のセッションぐらいになって，そして，ファシリテーターの僕が知らない間に，メンバーが帰ると決めて，ささっと行ってということで，もうファシリテーターの僕とメンバーとは，その帰ることをめぐって話すチャンスを与えられないままに，メンバーが帰ってしまったということはありました。そして，このときに思ったのは，相手によると思いますが，帰ったメンバーは，それなりの強さを持ってる感じの人なので，この人は追いかけて何とかしなきゃならないという気持ちは全然起こらずに，彼は彼の強さをもって，このグループを去っていったという感じで，心配はしなくて，それはそれで，1つのあり方かなというぐらいに受けとめました。去っていくときも，いろんなバリエーションがあるように思いますね。

○高良　医療では，困ったメンバーの扱い方というテーマがあります。この場合は，セッション中における中途退席者の扱い方という問題ですね。一般的に医療は構造によって守られている。たとえば，必ず主治医がいて，１対１の面談があります。私たちは，治療チームを組んでいるときに，リーダーとして，絶対にグループから離れてはいけない。中途退席者を追いかけることはあり得ない。だけど，コ・リーダーという役割(協働セラピスト)がいて，コ・リーダーはグループの中の個人を見ています。だから，退席した人を追いかけてもらうことはあります。

このとき，リーダーは何をするかというと，いいチャンスと考えます。「今，抜けちゃったけど，みんな，どうですか？」とグループに語りかける。つまり，目的が自分に気付くことにあるわけだから，様々なピンチはすべてチャンスなんです。むしろラッキーなんです。だから「今，１人抜けて，どんな感じがするだろう？」と投げかけてみるわけです。例えば，残された側の個人によっては「見捨てられ感」が出るかもしれないし，そこに気付くいいチャンスになりますね。

もちろん，抜けた人はフォローしなくてはいけないから，コ・リーダーが追いかけていって，退席の理由を聴いてあげます。また，主治医に連絡するということもあるし。その意味でも安全な枠があると考えます。確かに，エンカウンター・グループよりは，構造が明確であるという印象は持ちますね。

４．グループ臨床と個人臨床の違い

○参加者　グループにおいてのファシリテーターとメンバーという関係性と，個人臨床におけるセラピストとクライアントの関係の中で，ファシリテーターとセラピストの相通ずるものだとか，違いだとか，ファシリテーターとしてやっている自分と，セラピストとしてかかわっている自分の中で，違いだったりとかお話伺えますか。

○野島　そうですね，僕は両方，個人臨床とグループ臨床をやっていますが，違いは，個人臨床の場合は，そのクライアントさんの動きがどうなるかというのは，やっぱり二者関係ですから，二者関係でセラピストである自分の影響で，ほとんど規定されるという感じですね。それに対して，グループ場面は３人以上の集団になりますので，そうすると，僕もメンバーに影響を及ぼすことができますが，僕以外のメンバーも影響を及ぼすことができるという形で，そして，僕が，個人臨床だったら１馬力でかかわるとすると，グループ臨床で，僕がある人に対して１馬力でかかわって，ほかの人が３人くらいかかわってくれると，１プラス３で４馬力分ぐらい，相手の方に貢献するという感じがしてということで，個人臨床はもう僕の力以上のものは出ないけど，グループ臨床は，僕の力プラスメンバーの力で，非常にパワフルだという感じがあってというのと，それから，個人臨床ですと，僕の中での得手不得手があると思うのですよ。けれども，グループ臨床になると，僕の得手不得手のところの不得手のところをほかのメンバーがカバーしてくれたりしてということで，ある意味で，個人臨床よりグループ臨床は楽ですね。つまり，僕だけが頑張らなくたって，メンバー

が持ってる，何かヒーリングパワーみたいなのが働くのでということで。だから，個人臨床のほうがしんどいです。極端に言うと，100%僕の責任で動くという感じだから。

○参加者　1対1という個人臨床を1つのグループとして見るという感覚はありますか。

○野島　ありません。グループというのは，三者以上関係をグループと呼ぶのです。ですから，2人をグループという言葉は使えないのです。

そして，何が違うかというと，二者関係と三者以上関係というのは全然，質が違うんですね。三者以上関係があるということは何が起こるかというと，グループで起こることは，自己開示，それからフィードバック，そして触発というのが起こります。つまり，3人以上いると，Aさんが自分の父親との関係を語りますよね。そうすると，Bさんがそれを聞いていて，自分の中に触発されて，自分が語りたいことが起こります。そうした触発が起こるのがグループです。二者関係では，セラピストが，まず自分の父親の関係を話してということはありません。つまり，本人が父親のことを話すということで展開することはあっても，ほかの人が話すのを聞いて触発されて話すということがあり得ないということで，二者関係と三者以上関係は，もう全然質が違う構造という形で僕は考えております。

○高良　個人療法で，例えば「先生，結婚してるんですか？」と，個人的な質問をされたら，「どうしてそう思ったの？」，「あなたはどう思う？」とか，どうしようもない答えで返しますけど，グループセラピーで，そういう結婚の話題になったら「してるよ」とふつうに答える。それは使い分けます。

5．グループにクライエントが参加することについて

○高良　原則避けた方がいいのは，自分の担当クライアントがグループに入ることです。とはいえ実際には本当に入る場合があります，1人，2人と。無茶苦茶やりにくいですね。つまり，自己開示をどこまでしていいのか，それが個人療法に反映したらどうしようと思いながらやりますから。できれば，グループセラピストと個人療法家は分けた方がいいと考えています。

○野島　グループと個人の組み合わせの問題，専門語では，同じ担当者が個人カウンセリングもやって，グループを担当するという，これを俗にコンバインドセラピーという言い方で呼んでいて，それから，個人はA先生がやってて，グループはB先生がやってて，その人は両方同時に並行するというのをコンジョイントセラピーと普通呼んでるんですけれども，今，おっしゃってるのはコンバインドセラピーの問題ですね。

病院で25年間心理ミーティングをやってましたけど，僕の個人カウンセリングを担当してる人は，25年間1人もグループに入ってきませんでした。ということで，ちょっと経験がありませんが，学生相談等ではありますか。

○下田　大学で僕は，グループは継続的にはやらないで合宿でやりますけど，合宿にクライアントが来ることはあります。それ

は今，余り気にならないでやってるんですけど，それは多分，個人セラピーのプロセスに今，そんなにひっかかってないからですね。そこに何か問題があったら大変だけど，そっちはそっちで大丈夫だみたいな感じがあって，余り気になってないのだと思いまします。

○髙橋　私は完全に分けてないと，やりにくくてしようがないですね。グループの中にクライアントが来るかもしれない構造というだけで，来なかったとしても，グループを安心してできないなと。

サイコリトリートのような場を学生相談をしていた時に運営していて，クライアントのほうは，まず来ることなかったですけど，終わって終結して1年たってから，そのサイコリトリートの所に来て，何でもない話をして帰っていったケースがありました。その時は，カウンセリングが終わってしばらく日常を過ごされて，改めて私のところに本当のお別れに来たんだろうなという感じがしました。この時は，グループと侵入されるというか，混ざる感じはなく，むしろ，グループをやる場所で個人臨床をやっていてよかったなと思いました。

○参加者　そのサイコリトリートというのは，どういうものですか。

○髙橋　昼休みのときとかに開放して，いつも誰でも行き来ができる，お茶を飲める場所という。そうですね，グループをするというより，そういう場があるという感じです。なので，構造としては誰でも来られるしというのでしたし，スタッフは私がいますよというのを公にしているので，基本的には個人臨床で会ってる人たちは，そこには来なかったです。

○高良　あとは，グループのときに，自分の抱えているクライアントが入っていると，他のメンバーには，その人への嫉妬，ジェラシーが出てきます。こちらが特別扱いするつもりはなくても，話題の中に「あの時のカウンセリングは…」とか言われると，なおさらです。「私はスペシャルな存在だ」という隠れたメッセージをどう扱うか。また，そのことを他のメンバーがどのように見ているのかということも，1つの自己洞察のチャンスになります。それはちょっとエネルギーを使わなくてはいけないですが・・。「個人セラピーを受けている私は高良の特別な存在」ということじゃないですか，ある意味。それに対して，セラピストとして，メンバー同士の同胞葛藤としてのジェラシーをいかに扱うかということが問われるでしょう。

6．「構成」と「構造」の違い

○参加者　野島先生と下田先生がそれぞれ「構成」と「構造」というというふうに違う言葉を使っておられますが，それぞれの違いみたいなものもあるのでしょうか。そこのあたり，何か感覚を持っておられるか伺ってみたいです。

○野島　僕は，何かこういうグループ構成論みたいなのを考えるようになった背景としては，個人臨床があるんですね。僕の恩師の先生は前田重治先生といって精神分析の先生なんです。精神分析では，治療構造論という形で，治療構造をどう組むかということで，小此木先生以来のかっちりした1つの学問領域があって，それで，個人臨床をやってて，精神分析的なところにもファミリアでした。そうすると，グループだ

って個人臨床の構造論と同じように，構造論が必要なのでないかと思ったんですね。そして構造論というのが論として成り立つくらいの内容になり得るのでないかと思ったんですよ。ですから，本当は，エンカウンター・グループ構造論でもよかったんです。しかし，個人臨床で精神分析が構造論と言ってるから，何か余りにも精神分析に近いワードは嫌だなと思って，差別化するために，エンカウンター・グループ構成論としました。ただ，これ英語で言うと，Structureだから同じになります。ただ，日本語の語感として，精神分析との差別化。それから，個人臨床との差別化を図るために構成論という形で，僕はあえて「構成」という言葉を使っています。

○**下田**　僕の場合は，「構成」というと「つくる」という動詞だなと受け取ります。「構造」というのはできているものという感じがあります。「構造」をどう「構成」するかという感じだと思うんです。できているものは，何というか，土俵みたいなものですね。土俵をどうつくるかというときには，どういう土俵をつくるのかということが，まずはっきりしていないとできない。どういう土俵をつくるかというのは「構造」の話で，「構造」がはっきりしないと「構成」もできない。という感じで，まず「構造」が来たということです。

だから僕にとっては「構造」をどう捉えるかということが肝要です。「非構成的」グループというのはありますけれど，「構造」のないグループなんてあり得ないと思います。「非構成」という「構造」がちゃんとあるわけですから。

それと，「構造」には，何かを規定するはたらきがあります。グループのプロセスとか，動的なこととか，いろいろな変化とか。でも，「構造」自体は変わらない。土俵が傾いたり，土俵の砂がなくなっちゃったら困るので，土俵はしっかりとつくります。その砂が柔らかいか固いかによって，相撲は変わってきますけれど。つくるときには，ちゃんと意識してつくるという感じがあります。だから，いろんなことが起こる土俵とか，舞台とか，そういうものを大事にしたいので，そこに「構造」という言葉を使ったと思います。

○**野島**　僕も，僕と下田さんと違う言葉を使ってててどうなんだろうと考えてて，その途中で思ったのは，「構造」というのは戦略，「構成」というのは戦術というニュアンスが出てきました。一応，戦略と戦術と分けることありますよね。

ただ，そうすると，下田さんが土俵，舞台とおっしゃるんだけど，僕も構成論の中では，高良さんじゃありませんけど，これは舞台づくりだということのイメージしながら，ずっとつくったんですよ。舞台で，舞台の高さを何メートルの高さにするか，どれだけの広さにするか，そこには大道具，小道具をどれだけ置くか，照明をどうするかという，舞台をつくるというのが構成論のイメージだったんですね。そして，一応，配役として登場人物何人としてということで，ただ，舞台ですから，人はいないわけね。人はいなくて，一応，登場予定人物はいるわけ。そして，グループのプロセスが始まるということを，与えられた舞台の中で，一定のドラマが展開していくという感じなんですよ。

だから，僕の中では舞台とプロセスは峻

別していて，ただ，下田さんの中には何か，舞台とおっしゃるんだけども，舞台とプロセスが両方論じられてる感じがするのですよ。というのは，その辺は，ちょっと違うかなという感じがしました。

7．構成，非構成という表現の経緯

○高良　話が戻りますが，野島先生が，國分先生が言ってるような構成的なエンカウンターは，余り自分がやる感じではないとおっしゃったことについて，もうちょっと聞きたいのですが。

○野島　國分先生たちの流れと，それから，福岡で構成的なグループは，ほぼ同じ，もしかすると，九州のほうが先にスタートしています。そして，お互いに別々に流れがあって。九州のほうでは，どうして構成的な形になったかというと，看護協会とか看護学校のグループをやってると，自発参加じゃないので，「何でこんなことをやるの」とか，いろいろ言うのですよ，メンバーが。そうすると，非構成だけでやれなくなってきたんですね。そこで，九州では，ゲーム・エンカウンター・グループというネーミングで最初は取り組んだんです。僕の論文のゲーム・エンカウンター・グループという論文がありますが。ゲーム・エンカウンター・グループという形で，構成的ないろんな仕掛けを入れてということをやり始めてというのが，1970年代の多分，76，77年ぐらいだったと思います。

それから多分，一，二年おくれて，我々と全く無関係に，國分先生たちは八王子のセミナーハウスを使って，最初は，人間関係開発のプログラムという形で合宿をやっておられたんですよ。そして，1981年に國分先生が，構成的グループ・エンカウンターの本を書かれましたよね。

○高良　そうすると，構成と非構成というのは日本の概念なんですか。

○野島　言い方，あれなんかは僕なんかが言い始めたんだと思います。ロジャーズはベーシック・エンカウンター・グループという形ですよね。unstructuredという言葉はあったと思いますが。

○高良　それはあったんですね。

○野島　ただ，僕自身は，非構成からスタートして，ゲーム・エンカウンターという形で70年代の半ば過ぎから構成的なグループをやって，そして，80年代に入ってから，その看護学校のことがあって，半構成，セミ・ストラクチャードというのを考えざるを得なくなってということで，僕の中では，自分の体験をもとに3つのタイプができています。それで，お勧めとしては，非構成的なグループをある程度やれると，構成的なグループは抜群にうまくなります。けども，構成的なグループだけやってると，何か構成的なグループが余りうまくないように見えます。というのは，グループというのはプロセスだから，構成と言って仕掛けをいろいろ用いてても，仕掛けを用いることだけにとらわれていたら，グループのプロセスが見えなくなる。だから，グループのプロセスとか，一人一人の心のプロセスを見るという意味では，非構成を体験するとそれが養われるので，それをもとにして構成をやると非常にいいかと思います。

厳密には多分，unstructuredというのは存在しないのだと思います，厳密には。だ

から，僕の中ではHigh-structured，Low-structured，Middle-structuredという感じで捉えることがありますね。unstructuredって，何もないような感じですよね。けど，Low-structuredと言うとわかりますし，少なくともベーシック・エンカウンターだって，いつからいつまでと日程組みますから，日程も組まずに，ファシリテーターも決めずにということはないわけで，最低限のストラクチャーはつくるんですよね。ですから，それがHigh-structuredかLow-structuredかという違いという形で。本当は，Low，Highを使うほうが正確だと思います。

○参加者　野島先生は，そのグループのダイナミクスみたいなものを好まれているのでしょうか。

○野島　そうですね。何か僕の中では，人間の持つ主体性みたいなのが大事だという価値観があるんですよ。だから，主体性を発揮するには，High-structuredなシチュエーションよりも，Low-structuredなほうが主体性が発揮しやすいと思います。別にこれはよい悪いでなくて，好みだと思います。僕は人間の持つ主体性に重きを置くということで，好き嫌いで言うと，Low-structuredのほうが好きですね。

8．カリスマ的リーダーシップと集団志向的リーダーシップ

○高良　実際，グループセラピーの領域では，「カリスマ的リーダーシップ」と「集団志向的リーダーシップ」という考え方があって，カリスマ的リーダーシップというのは構造を持ち込んで，がんがんゲームやるし，じゃあ，握手しましょうとか能動的に介入します。一方で，集団志向的リーダーは，「leader less（リーダーレス）」というテクニックを使うので基本受動的です。それらのどちらがいい悪いではないですが，私たちは適宜使い分けています。例えば，中学校の母親学級のグループで沈黙なんてあったら，もう次回から来なくなっちゃう。そこでは始めに「自己紹介やりましょう！」というのが，むしろ人間として普通じゃないですか。心理系は普通じゃないから・・（笑）。そのことを意識しないと，お母さんたち次に来なくなりますよ。ということだから，私は，最初はカリスマ的リーダーシップを発揮します。もちろん，意識的にです。だけど，だんだん引いていく，少しずつ。また，健康度が高く自己洞察志向が強い場合，あるいは学生対象では最初からリーダーレスという治療的態度を意識します。それで，徐々に最後は介入して整理していきます。要するにこれらはリーダーシップの方向性の問題ではないかと思います。

ただし，好みがあります，きっと自分たちの中に。メンバーに任せるタイプとか，あるいは自分が仕切るタイプとか。

そして，カリスマ的リーダーシップを発揮した瞬間に，メンバーは子供になるという事象を自覚していなくてはいけません。つまり，リーダーがメンバーを子供にしてしまうわけです。一方で，集団志向的リーダーの元では，メンバーはどんどん活性化していきます。例えば，サッカーの岡田監督。あのジャージがいいんですね。何か一見能力のなさげなところ（笑）。結果，選手に自主性が生まれました。逆にあれが俺について来いという，どこかの新興宗教の長

みたいだったら，周囲のみんなを子供にして統制はしやすいけど，メンバーに有している「個」の成長は阻まれてしまう。つまり，両方の長所短所を知っておかなければならないということです。

9．グループ体験で磨かれる感性

○参加者　グループをすることで磨かれる臨床的なセンスについてどう思われますか。

○野島　ファシリテーターやってると，グループをやった後しばらく，個人セラピーでは，何となく自分の感度が上がってる感じがします。

それから，先ほども質問にありました個人セラピーとグループでのスタンスがどのように違うかということですが，何だろうね，何か僕の感じとしては，次第に個人セラピーとエンカウンター・グループとの間で，何か差がなくなってきてる感じが自分の中ではしています。

○高良　私もそういう感じはありますね，だんだん差がなくなるという。あと，論文を書いてるときは，間違いなくセラピーの力が落ちてますね。

○野島　そうそう，私もそれはわかります。

○高良　そうなんですか。

○野島　そういう側面と，それから，論文を書くことで，少し自分の視野が広がる部分があります。というのは，特に，失敗事例を丹念に自分で論文にすること。これは物すごく役に立ちます。大体，うまくいったグループは書こうという気が余りしないですよ。うまくいって，それだけで。けども，失敗すると，「何でうまくいかなかったんやろう」と悔いが残っているから，何やかんやと読み返して考えますよ。考えると，何か失敗事例を事例研究で書く前に比べると，世の中の見え方がかなり違ってくるので。

ということで，書くことで結果的には上がる。けども，先生がおっしゃるみたいに，書いている最中は大体落ちると思います。やっぱりこれ，グループの中でビビッドにいるということと書くということは対象化して言語化することだから，そこは下がるんだと思いますね。

それから，やっぱりグループをたくさんやっていると，いろんな修羅場を体験するわけですね。グループが崩壊して，もう駄目になるんじゃないかと思ったり。先ほど，ちょっと触れましたグループの中で精神病的な状態が生じて，僕が家までその人を送っていってというような場合ですね。そのグループは僕が帰ってきてからも，セッションは続けたのですが，最後のセッションぐらいになって，あるメンバーが何か，戦時中のUボートの話をし始めたんです。危機状態から浮かび上がって生還するという話。何かこんなのは別に意図してでなくて，メンバーがそれを語りたくなって語るんですよね。そして，その語りを聞くと，何か参加者も救われる感じがするんですよ。

という形で，そういう物すごく，どうしようもないくらいきついなというときに，そういう形で，グループが浮上してくるような体験があると，つまり危機場面から何とか，ピンチはチャンスで，ピンチをチャンスに変えたという場数を，1回よりは3回，3回よりは10回体験すると，何か自分

の中で，何というか，グループはやっていけるという感じがしてきます。

ということで，経験の蓄積が，何か信頼感をつくるんじゃないかと思います。だから，グループへの信頼が大事だと誰でも言うし，そう思うんだけど，グループへの信頼ということを，そういう危機場面を脱した体験を１回体験して持つ信頼感と，10回体験して持つ信頼感は多分，違うんだと思います。

そうなると，やっぱりピンチはチャンスのその体験をするということが，蓄積されることが大事なんじゃないでしょうか。

10. おわりに

○野島　今回，いろんな立場でいろんなことを考えている体験を，こういう形で言葉にして交わし合うということは，またこちらが活性化される感じがしますね。

○下田　そうですね。それで，頭の整理をしたりして，また，やりとりができるのが嬉しいですね。

○高良　楽しい時間でした，本当に。グループを一生懸命みんなで語れて。グループについて，みんなでこうやって共有できたことが嬉しかったです。

文献

下田節夫(1988)エンカウンターグループの「構造」について：『リーダーシップの分散』の実現を支えるもの，神奈川大学心理・教育論集，６，46-64.

野島一彦(1982)エンカウンター・グループ構成論，福岡大学人文論叢，14(1)，1-32.

野島一彦・下田節夫・高良聖・髙橋紀子(2014)グループの「構成」と「構造」：エンカウンターグループとサイコドラマの対話，跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要，10，27-37.